

を試みた。その結果次のようなことがわかった。

- 東京出身者の「かえる」「もどる」の意味特徴は、徳島出身者の私のものとほぼかわらない。
- 東京出身者は、「いぬ」という語を有しない。「いぬ」にちかい意味特徴をもつ語もみあたらない。「いぬ」をもちいる文脈では、すべて「かえる」か「もどる」におきかえることができる。

調査した東京出身者と筆者の言語歴は次の通り。

岩竹 俊一：1959年、東京都大田区雪ヶ谷生。現在に至る。

栗田 秀実：1950年、東京都台東区根岸生。1951年より文京区小日向在住。

酒井恵美子：1955年、徳島県名西郡石井町生。1962～1964年同県美馬郡脇町。1965～1972年同県名西郡石井町。1972～1977年高知市。1977年より品川区荏原在住。

かさねる・つむ

柴 田 稔

1. はじめに

国立国語研究所1964「2.155.4.結び、重ね、積みなど」の項から「かさねる」と「つむ」の二語を取りあげて考えていきたい。この二語においては「何かの上になにかをおく」ということが共通にいえる。もっと広く考えれば「のせる」「ならべる」なども類義関係にあるわけだが、ここではこの二語に限って分析してみた。

2. 「かさねる」「つむ」について

2.1. 対象の形

- (1) テーブルに 皿を かさねる。
- (2) テーブルに 皿を つむ。
- (3) 机に 本を かさねる。
- (4) 机に 本を つむ。
- (5) レンガを かさねて 壁を作る。
- (6) レンガを つんで 壁を作る。
- (7) ×ボールを かさねて ピラミッド型にする。
- (8) ボールを つんで ピラミッド型にする。
- (9) ひざに 両手を かさねる。
- (10) ×ひざに 両手を つむ。

「つむ」はいろいろな形のものを対象とするが、人体（の一部）は対象となりにくい。「かさねる」は対象物どうしがある程度の広さの接触面をもち、かさねられたものの安定した状態が予想される。したがって比較的平たい、上にのせやすいものを対象とする。

2.2. 対象の質

(1)～(10)では「かさねる」「つむ」は「ものの上に同じものをのせる」ことを表わしている。そして「に」格になつ名詞はすべて場所を示していた。しかし、

- (11) ノートに 本を かさねる。

という場合「ノート」は場所を示すわけではない。また「ノート」と「本」一冊ずつでもよいわけで、このような「に」は「と」と置き換えられる。

- (12) ノートと 本を かさねる。

- (13) マットレスに ふとんを かさねる。

- (14) マットレスと ふとんを かさねる。

「かさねる」を「つむ」とは言い換えられない。「かさねる」は「一つのものの上に一つのものをおく」という点で「つむ」より用法の範囲が広いとも考えられる。（この場合の方向性については2.4.参照）しかしここで、「ノートと本」は「文房具」、「マットレスとふとん」は「寝具」というような属性を仮に考えれば、それぞれ同質のものと考えられる。また、形・大きさも似たものである。

- (15) テレビに 腕時計を のせる。

これを

- (16) テレビに／と 腕時計を かさねる。

とは言えないだろう。「かさねる」「つむ」は同質（同じような形・大きさ・性質）のものを上にのせていくことである。

2.3. 対象の数・量

- (17) 机に 本を のせる。

この場合、本は一冊でもよいが、(3)(4)では本は必ず複数で、(1)～(10)においても対象はすべて複数である。また(11)～(14)でも「ノートと本」「マットレスとふとん」のように同質のものが複数あると考えられる。ところが、

- (18)トラックに 荷物を つむ。

という場合には、荷物は一個だけでもよい。すなわち荷物などを運ぶための道具（自動車・船・飛行機・リヤカー・カゴなど）に何かをのせる場合、対象は一つだけでも「つむ」という。これはなぜだろうか。ここで次のような文を考えてみる。

(19) 紙を 2 枚 かさねる。

(20) ×紙を 2 枚 つむ。

「つむ」はつんだあとの対象の占める空間が大きく、高さが高くなる感じがある。(2)(4)でも(1)(3)よりテーブル、机の上がかなり占領された感じがする。(20)が言えないのは紙を 2 枚かさねたくらいでは、空間的に大した変化がないからである。つまり「つむ」は対象が複数というより、対象に、空間的な存在感があるだけの「量」が必要なのである。

(21) タンカーに 石油を つむ。

(22) 貨車に 石炭を つむ。

(23) 砂場に 砂を つむ。

このように「つむ」の対象は不可算名詞でもよい。対象を、大きな空間を占める一つのかたまりとしてみるとき「つむ」が使われる。「荷物」はそのようなものとしてみられるので、数に関係なく(18)が言えるのではないだろうか。しかしこれも乗物にのせる場合に限られる。やはり「つむ」の特殊な用法であろう。

2.4. 方向性

基本的には「かさねる」「つむ」は「何かの上に何かをのせる」ことである。しかし、「かさねる」の場合と「つむ」の場合の上には違いがある。「つむ」の場合の「上」とは「地面に対して垂直方向で上」をいう。

(24) トラックに 羊を つむ。

この場合トラックの中で、羊が上になったり下になったりしているわけではない。が、「つむ」は2.3.で述べたように、つんだあと、空間的に高く、大きくなるわけで、上への方向性がある。ところがこれに対し「かさねる」で考えられる「上」は、もっと広い意味になる。

(25) 天井に 紙を かさねて はる。

(26) 服を かさねる。

(27) ふすまをはずして 壁に かさねて おく。

このように「地面に対して垂直方向で上」とは限らない。国立国語研究所1972によれば、「人間が目でみとめやすい、表になっている面の方向」(p. 261)である。つまり「かさねる」は対象物どうしの面と面が合わさっていけばよいのである。比喩的ではあるが、

(28) 写真に あの人の面影を かさねる。

のような用法も考えられ、「ダブらせる」「ダブる」などとも意味の類似が感じられる。

3. 自動詞「かさなる」「つもる」について

「かさねる」「つむ」に対応する自動詞「かさなる」「つもる」については、ここでは、くわしく記せないが、「かさねる」「つむ」の分析に示唆的と思われることにに関してだけ述べる。

3.1. 「つもる」について

「つもる」は用例が非常に少ない。

(29) 雪が つもる。

(30) ほこりが つもる。

(31) 落ち葉が つもる。

このように自然現象にしか使われない。箱がつんであることを、

(23) ×箱が つもる。

とは言わないだろう。しかし、細かく粒状に近い「同質のもの」が「大量に」「上に上に」とのっていくことは「つむ」の分析と一致する。

3.2. 「かさなる」について

(33) 木が かさなって むこうが見えない。

このように空間的には離れて、遠近をもって幾重にも並んで立っている木が、一体となって「合わさった一つの面」をつくり、見る人の視界をさえぎっているのである。空間的に対象物を離れた「かさねる」の例はみつけれなかった。しかし、「面が合わさってみえなくなる部分ができる」点は「かさねる」においても言えることである。

4. 派生的用法

(35) 苦勞を かさねる。

(36) 苦勞を つむ。

(37) 経験を かさねる。

(38) 経験を つむ。

(39) 失敗を かさねる。

(40) ×失敗を つむ。

(41) 修行を かさねる。

(42) 修行を つむ。

(40)が言えないのは「失敗」に「上への方向性」が感じられないからである。「かさねる」は、厚さがあまりないものを、面と面を合わせてのせていくことで、したがって、全体としては空間的变化があまりないことから「くり返し」の意味へと派生している。

(43) かさねて 手紙を 出す。
これなどは、くり返しの例である。また「つむ」の量感、上への方向性は、次のような文などにも表われている。

(44) 富を つむ。

5. まとめ

「かさねる」

同質のものを、ある程度の広さの接触面をもたせ、上へ上へとつけていくことである。

この場合「上」とは「地面に対して垂直方向で上」とは限らない。

あわさる面があれば、方向性はかなり自由である。
したがって対象物には、比較的平たい、上にのせていきやすいものをとることが多い。

「つむ」

同質のものを、多量に、空間的に大きなかたまりとして、上へ上へとつけていくことである。

方向は「地面に対して垂直方向で上」である。

いろいろな形のものを対象物とする。

言語経歴：1956年9月 神奈川県大和市に生まれ、現在に至る。

おす・おさえる・つく

木 川 行 央

1. はじめに

ここでとりあげる三語は、主体が何らかの手段をもって対象物に〈力を加える〉ことをあらわす語である。これらの語があらわす状態においては、その手段は対象物に接触している。しかし、ここではこの接触をこれらの語の特徴とはしない。現実世界において、実際にあるものに力を加えるという動作を行なう際には接触状態が必然的に生じ、また今のところ〈力を加える〉という特徴をもちながら接触が必要ない、またはありえないことをあらわす語がみあたらないからである。

また、〈力を加える〉という特徴には、「あたる」「あてる」「ふれる」などにみられる〈接触する（させる）〉という特徴とは異なり、手段の対象物への移動という前提は必要ではない。したがって次のように、手段が対象物に接触することを述べた後にこれらの語が用いられても、意味の重複は感ぜられない。

(1) のびたやつの両端に、手のひらをあてがって押せば、もと通りにちぢむ。（都筑道夫『東京夢幻図絵』中公文庫1978 p. 239）

ここで述べた点については、ここにあげる三語とも共通していると考えられる。以下各語について考えてみる。

2. 「おす」

2.1. まず、「おす」という語について考えてみよう。

浅野 1968 は、この語の意義素を次のように設定している。

〔接触して力を加える〕〔対象物を手前から向こうへ移動させる〕

このうち、〈接触して〉という部分については前述のとおりであり、一応不必要な特徴であるとする。次に、〈移動させる〉という点については、必ずしも妥当ではないと考える。「おす」という動作を行なった結果、移動するかしないかはこの語のあらわすところではない。この語において重要なのは〈力を加える〉という点である。もっとも、この〈移動させる〉という点を、目的と考えれば納得される。

(2) 後から 車を おしてくれ。

(3) ボタンを おす。

(4) おしても おしても 動かない。

ここで、次のような例を認めるかどうかが問題になる。

(5) 馬乗りになって 背中を おす。（『学研国語大辞典』の用例より）

(6) 花を おす。〔＝押し花を作る〕（『新明解国語辞典第二版』の用例より）

これらの例では、「背中」や「花」は目的としての移動も考えられない。このような、目的としての移動も考えられない「おす」は、「寝押し」「押し花」「おしがきいていない」の「おし」などにみられる。しかし、「おす」という動詞の現代における用法においては、上の(5)(6)や次のような例は不自然であると思われる。

(7)??蒲団の下に ズボンを敷いて おす。

よって、ここでは「おす」という語には、常に何らかの意味で移動が関与すると考える。